

林 峰男 & 加藤知子 & 伊藤 恵 室内楽の夕べ

シヨスタコーヴィチ生誕100年記念プログラム

ピアノ三重奏曲 第1番 ハ短調 Op.8シヨスタコーヴィチ

チェロ・ソナタ ニ短調 Op.40シヨスタコーヴィチ

ピアノ三重奏曲 第2番 ホ短調 Op.67シヨスタコーヴィチ

冬

四季²⁰⁰⁶コンサート

2006年12月10日(日) 6:45PM

会場:浜松市教育文化会館

主催:浜松音楽友の会

プロフィール

林 峰男 (チェロ)

幼少よりチェロを才能教育で学ぶ。桐朋学園にて斎藤秀雄氏に師事。その後、ジュネーブ音楽院を第1位で卒業。翌年スイス、ローザンヌ室内管弦楽団のソリストとしてヨーロッパにおいてデビューを飾った。1975年、ベオグラード国際チェロ・コンクール第1位に輝く。1976年には、ワシントンD.C.とニューヨークのカーネギーホールでリサイタルを開き、アメリカ・デビューを果たした。特に、カーネギーホールでのリサイタルは、ニューヨーク・タイムズが絶賛した。また翌年には、スペインで開催された「カザルス生誕百年記念コンサート」に招待され、日本を代表するチェロ奏者として高く認知された。日本へは、毎年定期的に帰国し、全国各地で積極的な演奏活動を行っている。2005年にデビュー30年を迎え、ますます円熟さを増している。現在、国際スズキ・メソッド音楽院教授。

加藤 知子 (ヴァイオリン)

4歳よりヴァイオリンをはじめ、三瓶詠子、故久保田良作、江藤俊哉の各氏に師事。第47回日本音楽コンクール・ヴァイオリン部門第1位、レウカディア賞受賞。翌年の海外派遣コンクールで特別賞受賞。1980年桐朋学園大学卒業。同8月、タングルウッド音楽祭に参加、メイヤー賞受賞。ローレン

ス・レッサーに師事。アスペン音楽祭、マールボロ音楽祭に出演、ルドルフ・ゼルキンらの指導を受ける。1981年9月から文化庁派遣研修員として、ジュリアード音楽院に留学。1982年第7回チャイコフスキー国際コンクール第2位受賞。1983年帰国。以来国内はもとよりアメリカ、ヨーロッパ、南米、韓国、中国、モスクワなどで各地でオーケストラとの共演やリサイタル・ツアー、川口リリアホールや水戸芸術館での定期的な室内楽への出演など常に高い評価を受ける活動を行っている。現在、桐朋学園大学助教授。

伊藤 恵 (ピアノ)

幼少より有賀和子氏に師事。桐朋学園高校を卒業後、ザルツブルグ・モーツァルテウム音楽大学、ハノーファー国立音楽大学卒業。名教師ハンス・ライクラフ氏に師事。1979年エビナール国際コンクール第1位、1980年J.S.バッハ国際音楽コンクール第2位、クルト・ライマーコンクール第1位、1981年ロン＝ティボー国際音楽コンクール第3位及び特別賞と数々のコンクールに入賞。1983年第32回ミュンヘン国際音楽コンクールピアノ部門で日本人として初優勝。内外の主要なオーケストラと協演を重ねている。1993年日本シヨパン協会賞、1994年横浜市文化賞奨励賞受賞。

林 峰男
加藤 知子
伊藤 恵
室内楽の夕べ



MINEO HAYASHI
TOMOKO KATO
KEI ITOH
CONCERT

●ピアノ三重奏曲 第1番 ハ短調 Op.8

ショスタコーヴィチ (1906~1975) は、ピアノ三重奏曲を2曲残した。この第1番は作品番号が示すように若書きの作品で、1923年8月、まだレニングラード音楽院の学生時代に作曲されている。当時ショスタコーヴィチは、1922年に父親を亡くして経済的に困窮していた。母親の献身的な努力や自身のアルバイト、また音楽院長グズノフの援助などがあって学業を続けることができたのだが、無声映画の伴奏ピアニストなどに携わっていた。その出張で訪れたクリミア地方でガールフレンドとなるタチアナ・グリヴェンコと知り合い、そこで創作されてタチアナに捧げられた。

単一楽章で書かれており、やや長い導入部からアレグロの主部に移り、コーダで終結するというソナタ形式を採っているが、甘美な主題がチェロからヴァイオリンに受け継がれるなど、ロマンが芳醇に香る作品となっている。ピアノ部分がやや脆弱だったことから弟子のティーシチェンコが補筆、現在はその版が用いられている。

●チェロ・ソナタ 二短調 Op.40

ブラウダ紙批判の対象になった歌劇「ムツェンスクのマクベス夫人」や、バレエ音楽「明るい小川」の後、1934年8月から9月にかけてレニングラードで作曲された唯一のチェロ・ソナタである。作曲様式の変化や新しい思想を模索する上での清新な手法が印象深い。ショスタコーヴィチが初期のモダニズム的な書法から、交響曲第5番などに代表される伝統的な語法への回帰を目指したことは明らかであり、またそういった形式の中で自らの個性を確立する試行錯誤を示唆するひとつの形でもあった。夏期休暇を取っていたショスタコーヴィチのもとに、ストラディヴァリウス四重奏団のメンバーで以前から親交のあったチェリスト、クバツキーが訪れ、ソナタの作曲を依頼したと伝えられている。

第1楽章：アレグロ・ノン・トロppo 二短調 4/4拍子

哀愁が漂う清冽な第1主題がチェロで現れ、やがて瑞々しい潤いを湛えた第2主題がピアノからチェロに受け継がれていく。リズムミッドな展開部から第2主題のみによる再現部を経て、弱音器を付けたチェロによってラルゴの葬送行進曲がコーダを形成する。

第2楽章：アレグロ イ短調 3/4拍子

極めて独創的で才気が横溢する楽章。チェロの刻むような音型とピアノの歯切れのよいワルツ主題が絶妙に絡み合う。中間部では、チェロが1本の弦でグリッサンドによるアルペジオを展開するが、そのフラジョレットも聴きもの。

第3楽章：ラルゴ ロ短調 4/4拍子

序奏を持つ三部形式。チェロによる主題は哀調と詩情に満ちた旋律美が際立っている。序奏主題と主要主題は多様に変化し、切なくメランコリックな情緒を創出する。

第4楽章：アレグロ 二短調 2/4拍子

ユーモラスな雰囲気から始まる自由なロンド形式。闊達なエピソードを挿みながら次第に高揚し、一旦落ち着いた佇まいを見せると急激なオクターヴの飛躍で全曲を閉じる。

●ピアノ三重奏曲 第2番 ホ短調 Op.67

ブラウダの批判に始まったショスタコーヴィチへの圧力は、ムラヴィンスキーによって初演された「交響曲第5番」での大成功で、見事に名誉を回復することになる。その直後第二次世界大戦が勃発、ソヴィエトもヒトラーの攻撃にさらされた。ショスタコーヴィチは疎開先で「交響曲第7番」を完成させてレニングラード市に捧げると、人々はこの作品に賞賛を惜しまず、アメリカでもトスカニーニなどによって頻繁に演奏された。続いて「交響曲第8番」を書いた直後の1944年、この「ピアノ三重奏曲第2番」は作曲されている。ブラウダ批判のときも常にショスタコーヴィチを支え、その年の2月に急逝した音楽学者・評論家であり大親友のソレルチンスキーに捧げられた。当時の作風を代表する、独特の極めて簡潔な書法が鮮やかである。

第1楽章：アンダンテ・モデラート

冒頭弱音器を付けたチェロが悲痛な主題を奏するが、この高音でのハーモニックス奏法は、作曲者が名チェリスト、ロストロポーヴィチに呈示して生まれたものである。

第2楽章：アレグロ・コン・ブリオ

いかにもショスタコーヴィチらしいスケルツォ。軽快なメヌエット風の主題が活き活きとした駆動力をもって発展、短いトリオの後主題が再現されて終わる。

第3楽章：ラルゴ

コラール風の半音階的和音がピアノによって現れ、続く主題はまさに悲歌である。この楽章は次の楽章へのいわば導入部でもあり、切れ目なく第4楽章に続く。

第4楽章：アレグレット

ビツィカートによるヴァイオリンの主題の後、舞曲的性格も有しながら発展するが、やがて第1楽章の主題も登場、消え入るように全曲を結ぶ。